

大工道具の史的研究—小林家所蔵の大工道具について—

清水 慶 一

国立科学博物館 工学研究部

A Historical Study on the Tools of a Japanese Carpenter, Tomezo Kobayashi

By

Keiichi SHIMIZU

Department of Engineering, Natural Science Museum, Tokyo

Abstract

While Japanese “daiku” is translated into a carpenter in English, a daiku holds main position to build a traditional timber construction building from carpentry to joinery in Japan. By the study on the development of techniques of a daiku, we can make clear how Japanese building technique has developed. Especially, the tools used by a daiku are one of the main themes of the study on Japanese building technique.

This paper is a study on the tools of a daiku, Tomezo KOBAYASHI (1885~1966). The aim of this paper is to make clear the historical value of the tools used by T. KOBAYASHI.

Three subjects of this study are as follows; 1. How many kind of tools are contained in these materials. 2. What a carrier the user of these tools had. 3. When each tool of a daiku was made.

Results; 1. On the whole, these tools show full variety of kinds which a master of daiku used before the Second World War, comparing with the research of the tools of a daiku by Labor Science Laboratory. 2. T. KOBAYASHI had a typical experience as a master of daiku from the Meiji to the Taisho Era. 3. These tools were made from early of the Meiji Era to before the Second World War.

Conclusion; These tools of a daiku are high grade materials to show the typical tools, which a master of daiku had used from the Taisho to the early of the Showa Era.

By this study, it makes clear that a method of classification established by Labor Science Laboratory is the useful method for the classification of the tools of Japanese daiku.

1. 緒 言

本研究は小林三重子氏所蔵の大工道具について、調査を中心とした研究である。これらの大工道具は三重子氏の父、小林留蔵氏が生前使用されていた道具であり、氏の死後も生前に使用された収納形式を踏襲し保管されていた。道具の保守は三重子氏により毎年行われたため、状態は良好であり、個

々の散逸も少ないと思われる。

従来の研究では、大工道具各種類において歴史的変遷や個々の工芸的価値は論じられることはあっても、大工職が如何なる編成の道具を所有していたか、つまり全体としての傾向や特徴を分析した研究はきわめて少ないと思われる。¹⁾ 本道具の使用者小林留蔵氏の、大工職としての主要な活動期が明治末より昭和戦前までであることより見て、本資料は当時の大工棟梁が如何なる編成の道具を所有していたかを知る上において興味深い資料とすることが出来る。

本研究は、全体としての大工道具の分析を軸とし、あわせて大工道具分類の方法、及び本大工道具の性格や資料的価値を研究することを目的としている。

2. 研究方法

2-1. 資料の状況

小林家において本研究の資料となる大工道具は、主要な道具箱 19 箱、及び大形の道具あるいは雑工具などの補助的道具 9 箱 (内 3 群は箱に入れられず) に分割され収納されていた。この保管の状態を示す表が〈表-1〉である。

これら各箱の内容は、ほぼ使用者がなくなった昭和 39 年当時の状態のまま現在に至っている。しかし、一部 (表-1, 雑 3 箱の如く) は現在の所有者が日常使用する道具を各箱より選出し、一まとめとしたものもあり、多少の移動も見うけられた。箱各々の内容に関しては、鋸、鉋、のみ等々と道具の種類毎に一応の分類がなされているとは言え整然とした整理が行われているのでは無く、かなり種類の異った道具の混在が見られた。道具の種類は大工道具が大部分を占めるが、一部に土工具の類、製図用具の類、建築用材料等、直接大工仕事に関係せぬ道具も含まれていた。

道具の状態は所有者の手入れにより概ね良好であり、錆が大きく浮いたもの、使用に耐え得ぬ程破損した道具はきわめて少なかった。これら小林家大工道具資料全数を研究室に持ち帰り分類・整理を行った。

2-2. 分類方法

分類作業にあたって、最も配慮したのは、小林家で保管されていた状態を出来得る限り壊さぬということであった。この為、箱及びその内容を含め一単位とし、あるいは箱に納められぬものは保管状態のままの一群を一単位とし、内容物である個々の道具についてデーターをとり、後に集計するという方法をとった。道具個々については出来得る限り詳細な分割を行ったが、建築金物、原材料等同種のものが多い重複する場合は一式とした。

大工道具の分類の方式及び道具の呼称について、その大要は慣用的にはほぼ定着しているとは言え、その詳細に至るまでの分類の方式及び呼称の統一は未だ無いと言ってよい。現在大工道具の呼称は地方的に異なり、また分類上主要な要素となる道具採寸方法も慣用的になされている。従って、本論文では道具の呼称・採寸方法等について、労働科学研究所編『わが国大工の工作技術に関する研究』²⁾での呼称・採寸方法を基本とし、これに含まれぬものは、吉見誠著『木工具使用法』³⁾ その他の著書⁴⁾の記述に従った。

分類にあたって道具の種類及び名称等についての標識は次の様に付けた。〈1. 道具種類, 2. 道具個々の名称, 3. 製作者銘あるいは製品名等, 4. 寸法〉, 具体例を示せば〈のみ, 叩きのみ, 正光銘, 1 寸 9 分〉となる。この標識を軸とし、個々の道具について計測箇所、形状の詳細等のデーターをとった。

2-3. 資料整理

以上の分類作業に基づき資料整理を行った。分類項目は後に本資料の特徴を比較・検討によって分

表-1. 道具箱及びその内容

箱 番 号	主要 道具	内 容	道具 概 数
1	墨掛道具定規類	墨壺, 糸巻, 墨指等	10(点)
2	黒掛道具, クリコ錐	下げ振り, 糸巻, クリコ錐, ドア取手金具等	7 "
3	鋸類・及びちょうな	鋸各種, ちょうな, 曲尺等	26 "
4	のみ類	のみ各種	15 "
5	"	"	11 "
6	"	"	26 "
7	鉋類	鉋各種	5 "
8	"	"	16 "
9	"	"	7 "
10	"	"	19 "
11	錐類	錐, やすり, その他雑具	19 "
12	玄能, 金切鋸, 金盤類	左同, 他に端金, やすり等	17 "
13	毛引類	毛引各種	17 "
14	やすり類	主として鉄工用大型やすり	18 "
15	目立用具類	目立用やすり各種等	12 "
16	砥石	砥石各種	3 "
17	"	"	7 "
18	鉞力用具	鉞力鉞, ハンダ鋺, ハンダ等	48 "
19	雑工具類	ハンドドリル, 金槌, ガラス切り等	20 "
雑 1*	大型工具	土工具, 定規等	16 "
雑 2*	"	土工具, 槌, 斧等	13 "
雑 3**	日用工具	玄能, かじや, のみ, 鉋, 釘ヱ等	13 "
雑 4	雑工具	タイルニッパー, 剪定鉞, 喰切, 矢床等	8 "
雑 5	掃除用具	小箒の各種等	3 "
雑 6	ひのし	同左等	2 "
雑 7	定規の類	合せ定規, 留定規, 木工用材料等	9 "
雑 8	紙やすり		1(箱)
雑 9	建具用金物		1 "

(注)

箱 1~19 までは、ほぼ使用目的及び道具の傾向の明らかなもの、雑 1~9 までは、分類の困難なもの。* は、箱入りでは無く一まとめにされていたもの。** は、小林三重子氏が箱より出し、日常用として使用したもの。なお、道具類は主要道具の概数を表わし、雑 8, 9 については道具類を一単位とした。

析を行う関係から、前述の労働科学研究調査による「大工道具編成表、第一形式」及び「入念仕事の場合」の道具編成を主要項目とした。この表は、同研究所が第二次大戦中に行った調査に基づき作成されたものであり、大工職が木造建築を建てる場合使用する必要にして充分な大工道具の編成が記されている。この表(以下「第一形式表」と言う)に含まれぬ種類の道具は適宜項目を追加することとした。またより以上細分類の可能なものは細目を適宜付加することとした。

以上の方法によって作成した資料目録(一部)が<表-2>、「第一形式表」との点数比較を行ったものが<表-3>である。この作業により小林家資料は約 400 点を数え、各項目の概要をつかみ得た。なお数量の算定にあたっては、「第一形式表」に準じ同一種類の道具でも主要部分の寸法の異なるものは 1 点として数えている。また、雑金物等同種の資料が多数重複する場合は 1 袋としこれを 1 点と数えた。小林家大工道具の編成と「第一形式表」の比較を更に詳細に行うため<表-4>を作成した。この表によって、本資料が大工工作上必要充分な道具編成に対し、どの程度の充足度を持っているか、あるいは

表-2. 資料目録

1. 墨掛道具・定規類

箱番	番号	道具名称	形状又は寸法	個数	摘	要
1. 1	墨壺					
1	1	6	墨壺壺豊銘	9尺5寸	1個	初代壺豊 昭和1ケタ
2	1	4	墨壺坪清銘	7尺5寸	1 "	初代 昭和10年前後
1. 2	朱壺					
1	1	5	朱壺	7寸	1 "	並, 車手作り
1. 3	墨指					
1	1	2	墨指(使用)	長約 250 mm	1束	6本
2	1	1	墨指(未使用)	大 330 mm 小 250 mm	1 "	14本
1. 4	曲尺					
1	3	23	曲尺	1尺5寸7分5厘	1本	昭和1ケタ代 象ガン入三条 [㊦] 製
2	3	22	"	1尺5寸	2 "	日本初のステンレス指金 昭和5~6年頃, 一, 三条 [㊦] 製, 一,
1. 5	巻金尺					
		無				Tokyo ⁺ 
1. 6	定規					
		無				
1. 7	合せ定規					
1	雑1	11	合せ定規	約 1m	2組	
2	"	9	"	約 700 mm	3 "	
3	雑7	1	"	440 mm	1 "	硬木製・紙ケース入
4	"	2	"	310 mm	1 "	"
1. 8	白糸巻					
1	2	1	糸巻	180 mm	1個	
2	1	5	"	110 mm	1 "	かるこ及本体に針付
3	2	3	"	65 mm	1 "	
4	2	2	"	60 mm	1 "	
1. 9	水平器					
		無				
1.10	留型定規					
1	雑7	3	留型定規	252 mm	1 "	
1.11	箱型定規					
		無				
1.12	斜角定規					

資料目録の一部を抜萃.

表-3. 労働科学研究所調査と小林家大工道具との種類別比較

種類	墨掛道具 定規類	鋸	鉋	のみ	錐	玄能 槌	釘締 釘抜	毛引	まさかり ちょうな	雑道具	他種道具	計
第二形式	10	4	9	14	10	4	5	2	2	12	—	72
第一形式	14	12	40	49	26	6	9	3	2	18	—	179
小林家大工道具	29	15	46	54	36	4	14	17	3	約 120	約 30	—

- 第一形式とは必要にして充分な整備形式. • 第二形式とは最低限の整備形式.
- 小林家大工道具の数は寸法, 種類の重複あるものをも合わせ集計した数, 雑道具, 他種道具は正確な種類数確定不能のため概数, 同総数は(一群のものは1種とし)約 403 点.

表-4. 労働科学研究所調査と小林家大工道具との比較

1. 墨掛道具 定規類	1	墨壺 (1/2)				
	2	朱壺 (1/1)				
	3	墨指 (2/2)				
	4	曲尺 (1/3)				
	⑤	巻金尺 (1/0)				
	6	定規 (2/0)				
	7	合せ定規 (1/4)				
	8	白糸巻 (1/4)				
	⑨	水平器 (1/0)				
	10	留型定規 (1/2)				
	11	箱型定規 (1/0)				
	12	斜角定規 [1]				
	13	巻尺 [2]				
	14	下げふり [3]				
X	その他					
2. 鋸類	1	鼻丸鋸 (1/1)				
	②	前引き (1/1)				
	3	かがり (1/2)				
	4	のこぎり	1	のこぎり (1/1)		
	5	両刃のこ (3/5)	2	いばらめ (1/1)		
	6	胴付切り (1/1)				
	7	畔引き (1/2)				
	⑧	引廻し (2/1)				
	⑨	細鋸 (1/0)				
	X	その他				
3. のみ類	1	叩きのみ (6/9)	1	平突のみ [2]	1	内丸突のみ [2]
	2	突のみ (5)	2	丸突のみ	2	外丸突のみ [4]
			3	その他の突のみ	3	壺丸形突のみ [5]
	③	丸のみ (5)	1	追入丸のみ [2]	1	下駄屋のみ [2]
			2	外丸のみ [1]	2	なぐりのみ [2]
					3	そりのみ [1]
	④	大入のみ (11/6)				
	5	鏝のみ (2/2)				
	⑥	込枠穴ほりのみ (1/0)				
	7	向う町のみ (5/4)				
	8	かき出しのみ (1)	1	銚のみ [2]		
			2	底さらいのみ [1]		
	9	打出のみ (1/1)				
	⑩	平つばのみ (1/0)				
11	丸つばのみ (1/2)					
12	しのぎのみ (4/2)					
13	薄のみ [3]					
14	鎌のみ [3]					
X	その他					
4. 鉋類	1	鬼荒しこ (1/1)				
	2	荒しこ (1/0)				
	3	申しこ (1/3)				

- 2 ちょうな (1/1)
- 3 X その他
10. 雑工用具
- 1 目立用具
- 1 目立やすり
 - 1 大引きり (1/0)
 - 2 中引きり (1/4)
 - 3 小引きり (1/0)
 - 4 相中 [1]
 - 2 上目やすり
 - 3 すり込やすり (1/多数)
 - 4 胴付やすり [1]
 - 5 きしゃげ [1]
 - 6 鉄工用やすり [多数]
 - X その他
- 2 砥石
- 1 裏押 (1/2)
 - 2 金剛砂砥 (1/1)
 - 3 荒砥 (1/1)
 - 4 中砥 (1/3)
 - 5 仕上砥 (1/2)
 - 6 合砥 (1/0)
 - ⑦ 丸のみ丸鉋用砥石 (1式) (1/0)
 - X その他
- 3 鋳力用具
- 1 けがき針 [1]
 - 2 鋳力ばさみ (1/2)
 - 3 矢床類 [3]
 - 4 つかみ箸 [1]
 - 5 半田付用具 [4]
 - 6 喰切 [1]
 - X その他
- 4 その他の工具
- 1 木工関係 [約 8]
 - 2 金工関係
 - 1 たがね類 [11]
 - 2 金切のこ [2]
 - X その他
 - ③ 小じゃっき (1/0)
 - X その他
- ⑤ 続飯道具 (1/0)
11. 左官用具
- 1 こて類 [4]
- X その他
12. 土工用具 [7]
13. 製図用具 [7]
14. 建築金物 [12]
15. 原材料・破損道具 [12]

太字で書かれた道具は、労働科学研究所調査による。第一形式（入念仕事の場合）として挙げられる道具。普通の字で書かれたものは、上記以外で小林家大工道具に含まれるもの。番号に○印の付けられたものは特に欠落の目立つもの。(A/B)は、Aは労働科学研究所の一道具異種寸法の数。Bは、小林家大工道具中の数（ただし、概数）。[]は、小林家大工道具にのみ含まれるものの本数（種類）。

編成上の特徴は如何なるものかを知ることができる。

3. 研究結果

小林家大工道具約 403 点について、分類整理を行った〈表-4〉を基礎とし、本大工道具資料と労働

科学研究所調査との比較検討を行った。これにより本資料について次の様な編成上の特徴が明らかとなった。

道具各種類に関しては

1) 墨掛道具・定規の類一卷金尺、水平器等が欠けているとは言え、概ねこの項目における道具の基本編成は満足している。「第一形式表」には含まれぬ、巻尺、下げふり、を墨掛道具・定規の類の新項目として追加した。

2) 鋸類一鋸種類中、前引鋸、引廻鋸、細鋸が欠落している。しかし編成上欠落の程度はそれ程大きいものではない。

3) のみ類一造作仕事において重要な役割をはたす大入のみは、基本編成上 11 種の寸法をそろえることが必要とされるが本資料は 6 種の寸法を数えるのみであり欠落の程度は大きい。一方、入念仕事の場合必要とされる突のみの類はその種類・寸法とも多様であり、本資料の特徴の一つとなる、特に本来の大工仕事には関係が薄いと思われる下駄屋のみの類が数本含まれている。

4) 鉋類一編成上、反り台鉋、横溝鉋が欠落している。しかし全体を通じて見れば、鉋各種類の種類寸法とも概ね必要十分な状態にあると言える。本資料の特徴は所謂しゃくり(決り)鉋、及び際鉋の種類が充実している点にある。なお小穴突は機械決り鉋の刃幅の小さいものと対応し、同じく充足している。

5) 錐類一編成上の種類は充足している。ボルト錐が欠落しているが、これは所謂クリックボルト錐の刃先を替えることで代用されたのではないと思われる。特に機械錐先端部の種類寸法とも各種がそろえられている。

6) 玄能・槌類・釘抜・釘締・毛引類、まさかり・ちょうなの類一以上は部分的な欠落はあっても、種類・寸法ともに「第一形式表」を満足していると言える。特に毛引類は、自作のものと思われ基本編成をはるかにしのいでいる。

7) 雑工具一「第一形式表」には見られぬ、様々な道具の種類を含んでいる。特に道具整備に使用される、目立用具他たがね、金切鋸など金工具の類が充実している。砥石の類はほぼ上記表どおりであり、弐力用具は様々な種類が含まれている。なお続飯道具は含まれていない。

8) 左官用具・土工用具・製図用具・建築金物・原材料等一以上は本来の大工道具では無く、本資料分類の為に新たに付加した項目である。土工用具が一通りの種類をそろえているとは言え、いずれも各一部分が含まれているに過ぎない。

本資料の一般的な特徴は、一部の欠落があるとはいえ、「第一形式表」との対応上、かなり充足度が高い、即ち本資料は本格的な木造建築の施工にあたって大工が必要充分とする道具編成に近いものと言うことができる。特に「第一形式表」以上に多種の道具がそろえるものは、突のみ、しゃくり鉋、毛引、機械錐先端部である。また、本資料は本来の大工道具のみならず、製図用具、土工用具等、大工仕事の周辺で使用する道具を含む資料と言うことができる。

4. 使用者の経歴及び道具の製作年代について

本資料の特徴や性格を一層明瞭とする為に、使用者小林留蔵氏の経歴及び道具の製作年代についての調査報告を以下に記す。

4-1. 使用者経歴

この内容は息女三重子氏よりうかがったものであり、資料的裏付けのとれるものは適宜付記した。(以下敬称略)

小林留蔵は明治 16 年 8 月 5 日、新潟県中蒲原郡新開村大字大関に生まれた⁶⁾。父金太郎は当地で大工を営み、親類・縁者にもこれに関係する職種が多かったと言う。留蔵も幼少より父親のもとで修業し、大工技術を身につけた。明治 36 年頃、日露戦争に従軍。⁶⁾ この後東京に出る。東京駅の工事に従事したと言う。⁷⁾ 木田組出入りとなる。大正 9 年頃函館に行き木田組関係の工事に関係する。関係した建物として可能性のあるものに同地の北海道拓殖銀行、函館大谷女学校、金森邸などがある。⁸⁾ 大正 13 年東京に引きあげる。同年、木田組を退き独立。建築請負業を始める。この後戦争の激化する昭和 15 年頃まで東京にて大工棟梁として活動する。施工主は海軍の退役軍人が多く、主としてその住宅関係の仕事が中心であったと言う。戦時中より戦争直後まで長野県に疎開。戦後一時期工場に勤めるが、戦後は本格的な建設工事より手を引く。昭和 38 年皇居田安門の修理に関係、昭和 39 年 81 歳で死去。

この経歴に見る限り、小林留蔵は明治より昭和戦前に活動した典型的な大工の 1 人と言うことができる。即ち大工職の家に生まれ、そこで従弟修業により技術を身につけ、都市に出て工事に従事しながら腕を磨き、大工棟梁として独立するという経歴である。この様な大工としての経歴を持つ者は数多く居たであろうが、この所有者において特徴的なことは戦争の激化した昭和 15 年頃すでに 60 歳近くに達しており、主要な活動をはたした後、戦争の混乱に見舞われたという点である。推測すれば、現在小林家に保管される道具は現役時の道具、即ち昭和戦前の道具編成より大きく変化するものではないと考えられる。棟梁として独立後、氏が如何なる立場で建設に従事していたかは不明である。しかし、小林家に現存する社名入りの積算用紙、及び自筆の図面等よりの資料より見て、少なくとも独立後、後半は業務の管理を中心とし、それ程の実際の施工は行われなかったのではないかとの推測も成り立つ。⁹⁾

4-2. 道具の製作年代について

本資料の製作年代の調査は、土田一郎氏の協力をあおいだ。¹⁰⁾ その調査の方法及び結果の詳細は本論では略す。概要を述べれば、調査は主要な道具を中心に行われ、主として銘、製品名、製作手法等



写真 1 縦挽鋸 三代目中や伊ノ助作 1 尺

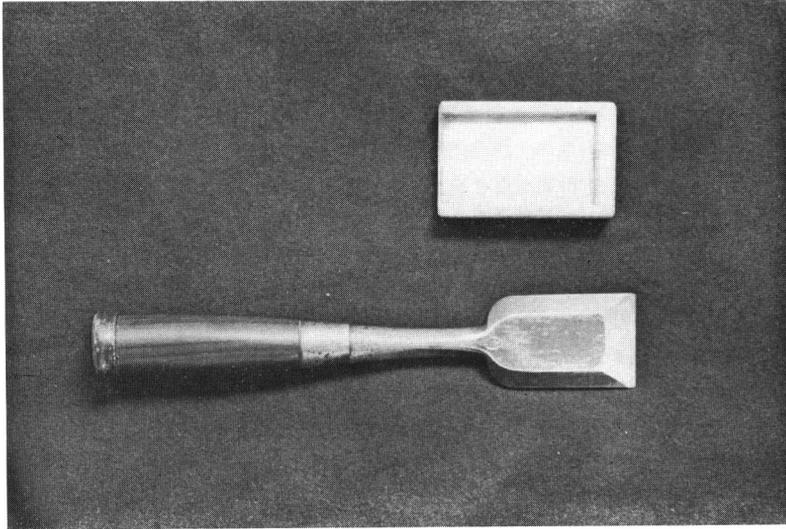


写真 2 叩きのみ 正光作 1 寸 6 分

について行われた。その結果、本資料の製作年代は明治初期より昭和戦後に及ぶものであり、特に大正期より昭和戦前に製作されたものが多数を占めることが判明した。¹¹⁾ その一例を上げれば〈写真 1, 写真 2〉の如くである。

本調査結果は使用者の経歴と符合し、本資料が一時代にまとめ買入されたものではなく、使用者の必要に応じ買入、あるいは譲与されたものであることを物語っている。

5. ま と め

以上の調査結果より小林家所蔵の大工道具資料について次の様な特徴を挙げることができる。

本資料は、労働科学研究所において行われた大工仕事をすすめる上で必要十分な道具編成、「第一形式表」との比較において明らかな如く、道具の基本編成は概ね満足する資料である。従ってこれより本資料が、明治より昭和戦後までの大工職の道具として、それ程の散逸や片寄り無く現在に引き継がれたものと見る事ができる。

本資料の固有の特徴として、突のみ、しゃくり(決り)鉋、機械錐の先端部の種類が充実している。また、資料全般においては、土工用具、製図用具等「第一形式表」に含まれぬ道具も多種混在している。

本資料の使用者小林留蔵は明治末期より昭和戦前を主要な活動期とした大工である。またその経歴より戦前における典型的な大工棟梁の一人といってもさしつかえ無い。道具の年代調査によっても、本資料の製作年が一時期に片寄るものではなく、明治初期より昭和戦後に到る広範な時期に及ぶものであり、特に大正期より昭和初期に製作されたものが多いことが明らかとなった。使用者の経歴との対応においても、この調査結果によく合致する。従って、本資料は戦前の大工棟梁が所有していた大工道具を軸とし、戦中より戦後の混乱期に製作された道具が一部混在する資料であると言える。

まとめれば、大工道具資料は昭和戦前における大工棟梁が使用した大工道具を中心とし、その編成

もそれ程の欠落は無い資料と言えよう。また戦中より戦後の道具も一部含まれ、明治大正昭和を通じ、建築生産の活動を行った大工職の道具編成を具体的に今日に伝える資料とすることができる。

なお以下に本資料及び分類方法についての考察を付記する。

本研究は小林家大工道具資料の分析にあたって、『第一形式表』との比較検討を中心として行った。この方法は結論の如く、大工道具の編成上の特徴をひき出す一方法と言うことが出来よう。しかし、今回の比較のみで、戦前の大工が使用した大工道具あるいは建設に関係する道具を確定することは出来ない。今後同様の調査を継続することが必要である。今回の分類においても、上記表に含まれぬ道具が数多く現われている。例えば木型製作等に使用したであろう下駄屋のみの類が本資料に多数含まれているが、これが戦中より戦後の混乱期に活動した大工職特有の特徴か、戦前においても編成上に組み込まれていたのかは本調査のみからは確定できない。今後大工道具の分類方法及び時代的な編成形態の変化を明確にする研究を継続して行く必要がある。

最後に資料の存在より教示下さり、研究においても様々に御指導下さった東京大学村松貞次郎教授、道具の名称、採寸法及び年代の判定等に御協力下さった土田一郎氏に感謝申し上げる。

注

- 1) 大工道具の発達変遷を扱った研究として、中村雄三、『日本木工具史』昭和 42 年、村松貞次郎『大工道具の歴史』昭和 48 年、等がある。
- 2) 労働科学研究所編『わが国大工の工作技術に関する研究』昭和 24 年。
- 3) 秋岡芳夫監修、吉見 誠著『木工具使用法』昭和 55 年、なお原著は昭和 10 年発行。
- 4) 例えば、全三木金物卸商協同組合発行、『三木金物カタログ』No. 303 など。
- 5) 生年及び出生地は、小林三重子氏が戸籍にて確認。
- 6) 従軍徽章が遺されている。
- 7) 東京駅の建設は明治 44 年から大正 3 年の間行われた。
- 8) 日本建築学会編『新版 日本近代建築総覧』1983 年、によれば、北海道拓殖銀行函館支店（現函館給食センター）同市末広町、大正 12 年 10 月 15 日竣工、煉瓦造 2 階、木田組施工、大谷女学校、同市千代台町、大正 10 年 11 月 1 日竣工、木造 2 階木田組設計施工、とし、竣工年及び現存が確認される。
- 9) 小林家に社名の入った見積り用紙及び、設計図の一部が遺る。
- 10) 土田一郎氏は大工道具の収集家であり、道具について詳しい、村松貞次郎『道具曼陀羅』（毎日新聞社）にしばしば登場する。
- 11) 大工道具の製作年等の調査についてはここではその結果のみを記すに留めている。製作年について述べれば、縦挽鋸 3 代目中や伊ノ助作、1 尺片刃、〈写真 1〉はその製作者より明治 10 年代とする、叩きのみ 正光作、1 寸 6 分 〈写真 2〉は大正初期とする。他に助国銘 左久弘銘等が道具に付けられ、これより製作年代を推定している。

